

[学術論文]

英語 P L T の比較研究

A Comparative Study of Personal Learning Theories of English

宮田 学
Manabu Miyata

要旨 ものごとを学ぶ方法は、人それぞれに微妙に異なっている。その人の性格、能力はもとより、それまでの学習体験や教わった先生の影響などにより、自分なりのやり方を確立している。その人独自のやり方を Personal Learning Theory (= P L T) と呼ぶことにすると、数学なら数学の P L T、世界史なら世界史の P L T があるはずである。同様に、英語の P L T もあると考えられる。そこで、英語 P L T を分析の対象にして、英語学習に最適な方法をさぐる試みを行うことにした。本論文では、「英語の達人」と称される人たちが著した「英語習得法」に関する文献の中から7冊を選び、著者の略歴と学習体験を紹介し、提案されている「英語習得法」を整理する。それに続いて、具体的な学習方法を抽出して、「全般(または総合)」「語彙」「聞く」「話す」「読む」「書く」の6つの分野に分類し、英語 P L T の一覧表を提示する。

英語 P L T を分析してみると、7人の「英語の達人」に共通してみられる学習法もあるが、その人に独特な方法もあった。そこに、それぞれの英語学習体験や英語観・教育観の違いを読み取ることができる。提案されている学習法の中から読者が自分に合ったものを選び出し、効果的な英語学習に取り組むためのヒントとしてくだされば幸いである。

キーワード： プラット、P L T、英語習得法、学習体験、英語の達人

1 英語 P L T とは？

われわれが学校や家庭においてものごとを学ぶ際には、たとえ年齢が低くても、自分なりの手順と方法で学習している。一方、教師が生徒や学生にものごとを教える場合はもちろんのこと、生徒・学生自身が友だちに何か教えてあげるといような場面をとっても、その人なりの教え方があるはずである。個性的な学び方を Personal Learning Theory、教え方を Personal Teaching Theory と名づけることにする。一人の個人の中には、学ぶ際の Theory と教える際の Theory とがあり、この2つの Theories は、その人の個性的な仕方ですく相互を規定していると考えられる。すると、それらをひとまとめにして、Personal Learning and Teaching Theory (= P L A T T :

プラットフォーム)と呼べるようなものがあるはずである。梶田正巳は、このように考えて「プラットフォーム」という概念を提唱した。梶田自身の言葉を借りれば、「人が学習や指導に対して内的に持っているパーソナルなもの（見方や考え方、つまり信念 (belief)）」のことである¹⁾。したがって、Personal Theory of Learning and Teachingという表現のほうが、より適切かも知れない。

教育心理学あるいは学習心理学の分野では、教授-学習過程に関して多数の価値ある研究がなされてきたが、教授理論や学習理論のある特定のモデルとして描くこと、あるいは、子どもの認知発達に関する一般的なモデルを描くことが多かった。PLATTの考え方は、あくまでも個人レベルでの諸要因を分析して、できるだけ個性的なものに迫ろうとするので、従来の研究方向とは異なったものとなっている。現場の教師にとっても、個々の生徒の学習スタイルを知りうることになるし、学習理論・教授理論という一般的なモデルから生徒に迫るのではなく、生徒から出発するので、これまでとは異なった対応ができるようになるかも知れない。教育における個の重視は叫ばれて久しいが、実現するための有効な切り口となるかも知れないのである。

宮田は、梶田グループの一員として、高校生の英語PLTを分析する研究にかかわったことがある²⁾。今回は、いわゆる「英語の達人」と言われる人たちが自らの英語学習体験や習得法について著述している文献を1冊ずつ取り上げ、その中で提案されている英語PLTを抽出し、英語学習者に役立つ資料を得ることにしたのである。本論文で取り上げた英語の達人と著書は、以下の通りである。

最所フミ『英語の習得法』(研究社出版、1981年)、松本亨『英語の新しい学び方』(講談社、1965年)、國広正雄『英語の話しかた』(サイマル出版会、1984年)、東後勝明『英語ひとすじの道』(日本放送出版協会、1985年)、近江誠『頭と心と体を使う英語の学び方』(研究社出版、1988年)、日野信行『トータルで650点-私の英語修業』(南雲堂、1987年)、政次溝幸『日本人ばなれの英会話』(ダイヤモンド社、1988年)

最初の3人は、雑誌や辞書の編集、ラジオの英会話番組、同時通訳の各分野における伝説的な人たちで、戦後日本の英語教育に貢献した、いわば第一世代の達人である。次の2人は、第一世代の達人たちの教えに学びながら、自分なりの世界を築いた第二世代の達人と言える。最後の2人は、英語教育界から離れた場所に身を置きながら、英語を道具として使いこなす達人である。

なお、明治時代からの「英語の達人」について紹介した文献に、斎藤兆史著『英語達人列伝』『英語達人塾』(いずれも中公新書)があることを付記しておく。

2 英語の達人たち

(1) 最所フミ (1908 ~ 1990年)

津田英学塾(現津田塾大学)卒業後、アメリカ合衆国のミシガン大学英文科に編入し、同大学院より文学修士の学位を受ける。帰国後、NHK国際局にて英語放送用の原稿作成を担当、さら

に朝日新聞社、外務省渉外部嘱託を経て、日本リーダーズ・ダイジェスト社編集局にて英訳・英文通信の仕事に携わる。著書に、『英語の習得法』のほか、『英語にならない日本語』『日英語表現辞典』『英語類義語活用辞典』などがある。『英語の習得法』で最所が提案している英語習得の順序は、comprehension（了解）→absorption（吸収）→expression（表現）であるが、その特徴をまとめると、以下のとおりである。

ア) 言葉の内容を体験する

言語習得は、言葉の内容をまず経験してからその名称を覚え込むのが常道である。ヘレン・ケラーが water という言葉を覚える場面がその典型。

イ) 文献を読む

自分自身の関心事を扱う文献を探して読む。1つの話題について、英語を媒体として、専門家の域に達することを目指す。

ウ) 読書の対象は幅広くすること

Time、Newsweek、Japan Times、Asahi Evening News、Student Times、Japan Times Weekly、『時事英語研究』『高校英語研究』などのうちから、これだと思う記事を選んで定期的に読み続ける。自分で選び、自分の考えた方法で摂取しなければいけない。

エ) 最良のコンディションで読む

例えば、朝の何時ごろ自分の精力がピークに達し、それがどのくらい持続できるかということを知っておくことが必要であり、読む速度をなるべく遅くすることが大切である。

オ) 全体像をつかむこと

作品を、生命力をもったトータルな存在としてとらえ、著者の知性の特性に関心を持って英文を読むことが大切である。

カ) 必要な英語の素養

最低、大学入試の英語は80%こなす読解力が必要である。最終的には心的態度にかかっている。

キ) 国際的に通用する英語を書く

英文を書くことは、ある意味では英語習得の旅の終着駅である。英語と自分の間に心理的な距離をおいてはいけなく、形式ではなく内容に関心を集中させなければならない。そのためには、英文を絶えず読むことが必要である。

ク) 自由英作文を試みる

自由英作文の目的は、自分の言いたいことを直接、正確に、英語しか分からない人に通じるような文章に綴ることである。そのためのポイントは、①普通のことであっても、効果的な説得力のある言葉で、人の興味を引くように書く、②英語の本を読み、その中で浮かんだ想念を、引き金となった英文の箇所と一緒に書き取っておく、③日常生活を送る中で心を揺さぶるもの

があったら、それについて書いてみることである。その後で、英米の新聞雑誌ではそのことについてどう書いているかを探し、どのように表現しているか研究してみると良い。

ケ) 黙読をすること

英文全体を黙読し、分からない言葉をチェックしておく。チェックした箇所を辞書ではっきりさせた後で、もう一度黙読する。

コ) 音読をすること

黙読の後、自分が満足できるまで音読をする。テープを使うのも良い。なるべく早い機会に、同じ文をもう一度音読する。静かで人のいない所でこれを繰り返す。英文は易し過ぎない、ある程度理屈っぽい現代文が良い。例えば、英米人の政治家のスピーチなど。

(2) 松本 亨 (1913 ~ 1979年)

明治学院高等部英文科卒業。「私は英語学者ではありません。英語作家です」と自らを称し、14年間のアメリカ留学中に、小説を含む英文の著書4冊を出版した。帰国後、明治学院大学、日本女子大学、フェリス女子学院大学にて教鞭を執った。そのかわり、NHKで「ラジオ英語会話」の講師を務め、22年間連続最長不倒の記録を樹立し、「放送文化賞」を受けた。1968年には、自らが学長を務める「松本亨高等英語専門学校」を設立した。著書に、『英語の新しい学び方』のほか、『英語と私』『英語で考える本』『松本亨英会話全集』などがある。

『英語の新しい学び方』では、学生時代に1日1冊をノルマにして英書を読み続けたこと、E. S. S. に属してスピーチ大会に出場した経験、アメリカ留学時代の体験などから、松本自身が提唱する英語学習法を解説している。

「英語をものにしたと思うなら、志を同じくする者と一緒に生活し、その人との日常会話は全部英語でやり、読むものは全部英語で、小説類なら1時間に50ページ、学究的な原書なら1時間に30ページは読めなければならない。1日たりとも読むことを怠ってはいけない。Read, read and read である。書くほうは1時間に2,000語が目標である。一人の時は、Listen, listen and listen である」と述べ、次のような要領を示している。

ア) 単語の覚え方

はじめての単語は目で見、口で言い、手で書く。しかも最小限20回、できれば50回それを繰り返す。語源で覚えることを心がけ、辞書を引く時は欲張る。新語は文章にすると記憶が長続きする。Thesaurus という類語辞典が、ずばりと言いつき言葉が思いつかなくて迷う時に役立つ。

イ) 単語から文章へ

速くたくさん読む秘訣は、目を訓練してなるべくたくさんさんの語を一度に見ていくこと。決まり文句やイディオムは、理屈ぬきで覚える。「文字さがし」や「語さがし」、Unscramble (無造

作に並べられた文字を置きかえて、ちゃんとした単語にする)などの英語遊びを取り入れる。

ウ) 英文の読み方

1行は、目を3回ほど静止して読む。これが読み方と理解の最大の秘訣である。1行の中にはだいたい3語ぐらい重要な言葉があるから、それを飛び石的にとらえていけば、全体の意味がわかる。ふつう、それは名詞と他動詞である。速読速解はこの要領で「鍵」を拾って読むことである。「鍵」になる言葉は、1語のことも、2語、3語のこともある。

エ) 英語を書く秘訣

基本的なトレーニングとして「入れ替え作業」を行う。「入れ替え作業」というのは、文章の中の1語か2語を、ほかの語と入れ替えることである。英文を書く基礎となるものは、「読書」と「入れ替え作業」と「自分自身の経験」である。日本語で原稿を書いたり、綴り、冠詞、単複など細かいことで悩んだりしないこと。上達の秘訣は、毎日何か書くこと、ふだんから「たね」をさがしておくこと、英語で考えること、ペンより速く次のことを考えることである。

オ) 会話の秘訣

パターンにとらわれず、同じ意味のことをいろいろと言い替えられる力、これが会話の最大の鍵である。会話はスムーズに流れなければならない。聞いて考え、考えて言うようでは場がしらける。Think as you speakである。この方法の基礎になるのは、第一に多読することである。会話は自分のペースで進めなければいけない。それは、相手の言うことを予測することによって可能になる。

カ) ヒヤリング上達法

速読の時と同じ要領で、大事な言葉だけを聞いていくのが第一の秘訣である。次に何が来るかを予測しえてはじめて、聞いていることがスムーズにわかるようになる。この予測の力を養うのは多読、速読である。

(3) 國弘正雄 (1930年～)

ハワイ州立大学院修了(文化人類学専攻)。米國務省、外務大臣秘書官、ハワイ大学・中央大学・お茶の水大学・上智大学講師、東京国際大学教授、日本テレビ解説委員、ニュースキャスター、参議院議員などを歴任する。神技とまで言われた同時通訳の草分けで、国際化時代の論客として、国際交流と国際的コミュニケーション活動に活躍してきた。著者に『英語の話しかた』のほか、『現代アメリカ英語』『國弘正雄自選集』など、訳書にリースマン『大学革命』『群衆の顔』、セント・ジェルジ『狂ったサル』、ライシャワー『ザ・ジャパニーズ』などがある。

『英語の話しかた』では、英語学習法として提唱する「只管朗読」についての自らの経験を詳しく紹介している。それによると、英語を習い始めた中学1年生のころ、先生が「英語を習う一番よい方法は、中学1年のリーダー、さらに2年・3年のリーダーを、声を出して繰り返し読むこ

とである」と言われ、1課について500回～1,000回も読んだという。戦争が終わった中学3年の時、アメリカ軍が進駐してきた。そこで、進駐軍の兵士に話しかけたところ、自分の言うことが相手に通じるだけでなく、相手の言うこともよくわかったというのである。提唱されている学習法は、この「只管朗読」に通じる。

ア) 文法は大切である

文法書に載せられている例文の多くは、英語の能力を身につける上で大いに有効である。例文は1つの重要なポイントを持った、いわば英語のエッセンスだからである。

イ) 只管朗読すべきである

中学のテキストを暗記することが基礎を作る。ただひたすら朗読するのではなく、リーダーの教科書用のカセットテープをよく聞くこと。もちろん、内容はよく理解しておく。聞く時のポイントは、個々の単語の発音、どの語とどの語がどのように続いているか、抑揚は上昇調であるか下降調であるか、どこでポーズを置いているかである。

ウ) 只管筆写をすべきである

何回も文を書くことによって、文法も身につく。

エ) ヒアリングは難しい

カセット、レコード、テープを聞く際に、個々の単語の発音やアクセントに注意するよりも、むしろいくつかの単語のまとまり、つまり語群の発音やストレスの置き方により多くの注意を払う。聞き取るためのテクニックとなる「化学変化の法則」を身につけ、テレビ、カセット、ラジオなどを注意深く聞く。

オ) 話し方のポイント

文章のリズムと文強勢は、特に大切である。リズムが英語の流れに乗り、文強勢の位置が正しければ通じる。そのために、長い期間絶えず英語を聞く、英語の歌を聞いて自分で歌う、英語の詩を音読することなどが効果的である。

(4) 東後勝明(1938年～)

早稲田大学教育学部英語英文学科卒業、同専攻科修了。ロンドン大学、オハイオ州立大学に留学。ロンドン大学にて修士の学位を受ける。専門は応用言語学。早稲田大学教授として教鞭を執るほか、1972年～1985年に、NHK「ラジオ英語会話」講師を担当。明快な解説と美しい英語の発音で人気が高かった。主な著書に、『英語ひとすじの道』のほか、『英語会話コーヒー・ブレイク』『英語会話の試運転』『英会話110番』『英語発音の手ほどき』『英会話最後の挑戦』などがある。

『英語ひとすじの道』では、中学・高校時代に上記(2)で紹介した松本亨の「ラジオ英語会話」を毎日聞き続けた話、文法の参考書を読破した経験、大学時代の英語会(E. S. S.)でリンカーン大統領の Gettysburg Address 暗唱大会で優勝した時の逸話などとともに、以下のような学習法

を提案している。

ア) 通じる英会話のために

英会話の勉強の第一歩は、まず自然の速さで話されている英語に耳を傾けることから始まる。英語を正しく通じさせるためには、個々の発音よりも正しいイントネーションが大切である。

イ) 分かる英語のために

辞書をかたっぱしから暗記しても効果は上がらない。単語を覚えるということは、ただその訳語を機械的に覚えることではなく、その使い方を覚えることなので、必ず文の中で覚える。また、文法は1つの目安に過ぎない。生きた言葉は、使われる状況、相手、場所などによって絶えず変化する。その変化とともに、実際の言葉のあるがままの姿を学び取ることが大切である。

英語で考える第一歩は、英語の意味を調べ、文法の知識を頼りに文を分析し、最後に日本語に訳すことである。対話であれ、文型であれ、表現であれ、がむしゃらに吸収する(=暗記する)姿勢がなければ、英会話の力はつかない。

ウ) 思い切って話す

英会話の習得にインスタントはありえない。一にも二にも覚える努力あるのみ。覚えたら、それが完全に身につくまで反復練習し、実際に使ってみる。まずは口を開くこと。話さないからいつまでたっても話せない。最初からすらすら話せる人などいない。練習を積み重ね、少しずつ話せるようになっていく。

(5) 近江 誠(1941年～)

南山大学文学部英語学英文学科卒業後、愛知県立時習館高校教諭を経て、フルブライト留学生生として渡米。インディアナ大学大学院で「スピーチ・演劇」を専攻し、修士号を取得。帰国後、南山短期大学教授、日本コミュニケーション学会会長を務める。名スピーチや名セリフを解釈し、その人の気持ちになりきって朗読をさせるという独自のメソッド(=オーラル・インタープリテーション)は有名。『頭と心と体を使う英語の学び方』のほか、著書に『オーラル・インタープリテーション入門』『英語コミュニケーションの理論と実際』『感動する英語!』『間違いだらけの英語学習一常識38のウソとマコト』などがある。

「海外留学したからといって、英語が上達するわけじゃない」と語り、自分自身はアルバイトの百科事典のセールスの仕事がためになったと言っている。そのトレーニングはすさまじく、大量のプリント教材を渡され、セールスマンの口上を覚えさせられたと言う。そうした経験を踏まえ、以下のような学習法を提案している。

ア) 英語学習における大切なポイント

読み書きだけの学習には限界がある。聞き取ったり話したりする能力、あるいはそれに必要な感覚を練磨することなしに、真の深い読みというもの成立しにくい。英語は「血の通った

人間の語り」である。たとえ活字であっても、背後に血の通った人間の息づかいがある。語り手がいれば聴き手（読者）もいる。英語を本来の生きた言葉として扱う方法は、学習者自身の頭と心と体を総動員して学習することにつきる。

イ) 聞く－聴解力－

聞いて分かることの基準は、①何を、②どの程度の理解度で、③どの程度のエネルギーの消耗度で、の3つである。聞いて分かるためには、生の英語を聞きまくることが一番大切である。聞く絶対量を増やし、楽な気持ちで聞くのが必要となる。聞く力をつける3つの方法は、①衛星放送と新型短波ラジオを聞くこと、②限られた材料を精聴すること、③英語を読むのを忘れないことである。

ウ) 読む－読解力－

読みが読みであるための前提条件は、訳さず分かること、音声・身体感覚を働かせていることである。読めるということは「第三の読み」つまり「批判的味読」である。それは、文章その語り手の思考と感情の状態で読みつつ、ものによってはさらに、その継続的な叙述や描写の展開に沿って想像の世界に自己を投入し、登場人物になったつもりで共に行動し、同じ心理状態で読むことである。と同時に、その形式（言語表現）を内容と書き手の最終意図との関係から評価しつつ読む、という読み方である。

このように読めるようになるためには、「解釈のポイント」を考え、これに合わせて解釈分析していくことである（＝表現読み解釈学習）。空間構造はどうなっているか、論理構造はどうなっているか、筆者の最終目的は何か、情緒構造はどうなっているか、筆者の思考や感情はどうなっているか、および、レトリック批判である。

エ) 話す・書く－表現力－

話すということの本質は、音声によるコミュニケーションである。話すことと書くことは一体である。自由に英語を話し、書けるための唯一の道は、常に本物の英文を覚えることである。その覚える（入力する）方法は、聞き取り（多聴）からの無意識的英語入力、聞き取りからの意識的英語入力、読書（多読）からの無意識的英語入力、読書からの意識的英語入力、英語での情報入力と英語入力に大別できる。

アウトプットの練習は、独り言と随筆書きである。最終目的は情報の伝達か、説得か、楽しませることかを定め、その目的に最適の材料を集めて話の配列と構成を考え、目的に合った文体を考え、語るつもりで書く。普段から、スピーチの練習をし、文章の構成についての知識をつけ、批判的味読を心掛けて、そのエッセンスを入力することである。

(6) 日野信行(1958年～)

大阪大学法学部卒業後、石坂記念財団奨学生としてハワイ大学大学院修士課程英語教育学研究

科に留学。帰国後、東京国際大学助教授などを務める。『トーフルで650点－私の英語修業』のほか、ミード著『火薬をしめらせるな』の翻訳（國弘正雄と共訳）、“Training ESOL Teaching”の学術論文（ジャック・リチャーズと共著）などがある。

『トーフルで650点－私の英語修業』では、中学時代にポップスを通じて英語に興味を持つようになったこと、松本亨著『英語の新しい学び方』や國弘正雄著『英語の話しかた』に感銘したこと、大学生時代に英語の面接で失敗したことがきっかけで、アメリカ人宣教師のバイブルクラスに4年間毎週通ったことなどが紹介されている。英検一級に合格し、TOEFLで650点の好成績をおさめたことから、自分なりの学習法を提案している。

ア) 読むこと：只管朗読と只管筆写

英語の教科書、本、テキストなどを毎日欠かさず、500～1,000回くらい反復音読する。切るべき所ではポーズを置き、続けて読むべき所ではサッと読み、英語のリズムを身につける。そのことによって、英文の意味、構造もそのリズムに合わせて理解できるようになる。それができたら、ひたすら教科書を書き写し、10回程度繰り返して、手に英語を覚えさせる。次に直読直解に移る。英語の語順通りに頭から読んでゆき、日本語を介さずにイメージを頭に描く。

イ) 聞くこと

付属テキストのあるラジオ講座、テレビ講座が良い。これを録音して何度も聞く。不明部分をテキストで確かめ、場面を想像したり、思い出しながら、また何度も聞く。次に、テレビの二か国語放送（ニュース・洋画・スポーツ中継）、ラジオ（FEN）、洋楽等を聞く。

ウ) 話すこと

発音記号はマスターすべきである。教科書準拠のレコードや、ラジオ・テレビ等を活用して、音の確認をする。実際の音を聞きながら、自分にとって最も発音しやすい方法を工夫すると良い。英語を話せるようになるには、「英語圏の人と話す」という現実的状況における訓練が必要である。コミュニケーションに支障がない限り、日本式英語で構わない。会話の後は、その内容について「ああ、あそこはこう言うべきだった。あそこではこう答えればよかった」と、反省する習慣をつけることである。

(7) 政次満幸(1924年～)

大阪外国語大学英語部卒業。三菱石油人事部訓練課より、国連へ産業訓練専門家として移動。世界各国で活躍する。国連工業開発機構(UNIDO)産業訓練課シニア・オフィサーとしてウィーン本部に勤務後、人材育成専門家として「マネジメント・インタナショナル」を主宰。執筆、講演にも活躍している。日本人ビジネスマンに英語、アメリカ外交官に日本語を教えた経験もある。日本人ばなれした英語を話し、日本人かと疑われることもあると言う。著書に、『日本人ばなれの英会話』のほか、『男の切り札』『英語はセンスだ』『英文ライティング上達法』などがある。国際

派著述家で、英語で書いた“*How to Run a Successful Business*” “*The Modern Samurai Society*”などもある。

毎朝、早起きの妻にFENの放送を枕もとでつけてもらい、5～6分聴きながら目を覚ましたという経験を持ち、「英会話を上達させたいと思ったら、聞こうとする努力、話そうとする努力が必要です。本を読んでいるだけでは、ちっとも上達しない」と述べ、以下のような学習法を提案している。

ア) ヒアリングについて

カタカナ英語は日本語のような発音なので、正しい発音が頭に入りにくくなってしまう。目や耳から入ってきたカタカナ英語に対しての批判精神を旺盛にして、脳が拒絶反応を起こすように習慣づけることが有効である。そのため、テレビ、ラジオ、映画を活用する。一度聞いたニュースは、もう一度テレビの音声多重放送の英語放送で聞き直す。洋画は、1回目は字幕を読みながら、2回目・3回目は字幕を見ずに英語だけを聞いてストーリーを追ひ、会話に耳を集中させる。前置詞や子音で終わる語の次の語が母音で始まる時、連結されやすいので注意する。一人で部屋に閉じこもり、英語の放送を聞き、英字新聞を読み、洋画をテレビで鑑賞し、英語の歌を歌って一日を過ごすといい。

イ) 会話について

自分の意見を持っていなければ、会話は成り立たない。消極的にならずに、どんどん話そうとする姿勢が大切である。英語を単なる知識として記憶しただけにとどまらずに、それを使うようにする。日常生活の中でも、あいさつを英語で言ってみる。無駄だと思っても、毎日続けているうちに発音が良くなってくる。声を出さなければ、いつまでたっても話せるようにはならない。

ウ) 発音について

英語の発音には一定のパターンがあるので、これを頭に根づかせる。カタカナ読みをしていると誤った発音になってしまう。発音の短所を矯正することが必要である。辞書を活用して発音記号を調べ、2～3回声を出して練習する。日本語にはないリズムをつかむ。英語の歌を歌うことの良い点は、メロディがついている、アクセントがある、楽しく舌を回せることである。

エ) 単語を増やしていく方法

新聞を活用し、記事の見出しをかたっぱしから読んで、辞書を引く。写真のキャプションを読む。単語がわかったら声をあげて読み、次には新聞を見ないでしゃべってみる。

オ) 読解について

読めない英語はしゃべれない。目に入った英語を順番に読んでいくという「読直解スラスラ法」を行う。1語1語読みながら、かたまりごとに理解して、次々に推理して読む。最初の一文は書き手の特別な力がこもっているものなので、それをしっかり読んで完全に理解する。そ

の文章が何を語ろうとしているのか、何を語っているのかをできるだけ早くつかむ。日本語にはない品詞に注意する。目から入ってきた語を順番に読むことによって、耳から入ってきた英語を順番に聞くことに慣れていく。

3 英語 P L T の分野別一覧

7人の英語の達人が提案している学習法 (= 英語 P L T) を抽出し、6つの分野に分類して示すことにする。すでに紹介した内容と重複する場合もあれば、さらに具体的な英語 P L T となっている場合もある。「話す分野」に関しては、3つの下位分類を設けることとした。

各分野 (および下位分類) における英語 P L T を第2節で紹介した達人の順に並べることを原則としたが、似通った英語 P L T については順序を入れ替えて示すこととした。また、だれがその英語 P L T を提唱しているかがわかるように、末尾の括弧の中に苗字の最初の1文字を示してある。

[1] 全般 (または総合)

- 1 英語に関するあらゆる活動に共通な最大の鍵は、次に来る言葉を予測すること。(松)
- 2 只管筆写をすることによって、文法も身につく。(國)
- 3 只管筆写：ひたすら教科書を書き写し (10回程度)、手に英語を覚えさせる。(近)
- 4 実際の言葉のあるがままの姿を学び取ることが大切である。(東)
- 5 たくさんの生の英語を、それが用いられた場面や状況と一緒に頭の中に蓄える。(東)
- 6 対話であれ、文型であれ、表現であれ、とにかくがむしゃらに吸収する姿勢がなければ英会話の力は絶対つかない。(東)
- 7 自分自身の頭と心と体を総動員して学習する。(近)
- 8 自分を英語漬けにする：一人で部屋に閉じこもり、英語の放送を聞き、英字新聞を読み、洋画のドラマをテレビで鑑賞し、英語の歌を歌って一日を過ごす。(政)

[2] 語彙の分野

- 1 はじめての単語は目で見、口で言い、手で書く。最小限20回できれば50回それを繰り返し、見慣れること。(松)
- 2 幅広く覚えるために、語源で覚える。辞書を引く時は欲張る。(松)
- 3 新語を文章にし、意味で覚えるより使い方で覚えることである。(松)
- 4 単語は必ず文の中で覚える。単語を覚えるということは、ただその訳語を機械的に覚えることではなく、その使い方を覚えることである。(東)

[3] 聞く分野

- 1 大事な言葉だけを聞いていき、次に何が来るかを予測する。(松)
- 2 リーダーの教科書用のカセットテープをよく聞くこと。(國)
- 3 個々の単語の発音やアクセントに注意するよりも、語群の発音やストレスのおきかたにより多くの注意を払うこと。(國)
- 4 Did you が「ディッジャー」となる、というような化学変化に注意して、注意深く聞く。(國)
- 5 連結音が聞こえるようにマスターする。(政)
- 6 カタカナ英語を頭から締め出す。(政)
- 7 自分のレベルに関係なく、生の英語を聞きまくることが一番大切である。(近)
- 8 テキストのあるラジオ講座・テレビ講座を録音・録画しておき、不明部分をテキストで確かめ、場面を想像したり、思い出しながら何度も聞く。(日)
- 9 テレビの二か国語放送、ラジオ(FEN)、洋楽等を聞く。(日)
- 10 日本語で聞いたニュースを、もう一度テレビの音声多重放送の英語で聞き直す。(政)
- 11 英語のニュースやラジオの英語番組を聞く。(政)
- 12 洋画を1回目は字幕を見ながら、2～3回目は見ないで、ぶっ通しで3回見る。(政)

[4] 話す分野

(a) 発音・音読面

- 1 発音を正確にするためには音読が必要。まず黙読してから音読すると良い。(最)
- 2 化学変化の法則を身につけ、只管朗読を行う際にそれを実行する。(國)
- 3 文章のリズムが英語の流れに乗り、文強勢の位置が正しければ通じる。(國)
- 4 英語を正しく通じさせるためには、個々の発音より正しいイントネーションや与えられた場面との関係の方が大切である。(東)
- 5 棒読みの英語にならないよう、会話にアクセントとイントネーションをつける。(政)
- 6 音節ごとに一定のリズムを保ち、アクセントをつけて正しい発音をする。(政)
- 7 只管朗読：英語の教科書などを毎日欠かさず反復音読する(500～1,000回)。切るべき場所でポーズを置き、続けて読むべき場所ではサッと読み、英語のリズムを身につける。(日)
- 8 コミュニケーションに支障がない限り、日本式英語で構わない。(日)
- 9 発音記号はマスターすべきである。教科書準拠のレコードや、ラジオ・テレビ等を活用して、音の確認をする。(日)
- 10 辞書を引いて発音記号を調べ、その場で2～3回声を出して練習する。既知の単語についても、辞書で発音記号を学習し直す。(政)
- 11 実際の音を聞きながら、自分にとって最も発音しやすい方法を工夫する。(日)

- 12 綴り字と発音の関係規則をつかむこと。(政)
- 13 日本人が苦手とする発音を克服する。(政)
- 14 英語の歌を歌う。練習用にいい曲は“Row, Row, Row Your Boat”である。(政)
- (b) 表現・素材面
- 15 英語会話の勉強の第一歩は、自然の速さで話されている英語に耳を傾けること。(東)
- 16 自由に英語を話し、書けるための唯一の道は、常に本物の英文を覚える(=入力する)ことである。(近)
- 17 一にも二にも覚える努力あるのみで、覚えたら、それが完全に身につくまで反復練習し、実際に使ってみること。(東)
- 18 聞き取り(多聴)から無意識的英語入力を行う: 浴びるほど聞いていくうちに、自然に言葉が吸収されていく。(近)
- 19 聞き取りからの意識的英語入力を行う: 部分的に盗み取って口頭で練習し、そして応用練習する方法と、全体を聞き取って、反復して練習し、発表練習する方法がある。(近)
- 20 読書(多読)からの無意識的英語入力を行う。(近)
- 21 読書からの意識的英語入力を行う: 解釈分析をし、記号付け(書き込み)を行ってから、覚えるための朗読をする(V S式只管朗読)。頭と心ばかりでなく体も使い、演じる様に声を出して読むのがコツ。そして口頭で再生してみる(モノローグの再生)。半分はレシテーション、半分は即興の発表形式である。ここでは自分の言葉として話すことが望ましい。またアドリブを含めつつ、再生していくこともいい(ミニ講義)。(近)
- 22 英語での情報入力と英語入力を行う: 英語で流れてくる情報を、そのまま英語で整理、インプットしておく。英語以外の情報を英語で入力する。(近)
- 23 対話文からの英語入力を行う。(近)
- 24 アウトプットの練習-独り言と随筆書き(もちろん「英語」で考える)。(近)
- (c) 訓練・実際面
- 25 パターンにとらわれず、同じ意味のことをいろいろに言い替えられる力が会話の最大の鍵である。(松)
- 26 大切な言葉を聞き取る。それは、はじめと終りにくることが多い。相手の言うことは、ある程度予測できる。決まり文句を知っていれば、聞くのも話すのも楽である。(松)
- 27 話しながら文章を作ること。その基礎になるのは、多読することである。(松)
- 28 相手の先に行くようにする。相手の言うことを予測することによって、しゃべりながらも聞きながらも、次のことを考える。(松)
- 29 「英語圏の人と話す」という実際の訓練が必要である。(日)
- 30 外国人との会話の後には、その内容について反省する習慣をつける。(日)

31 自分の意見を持ち、どんどん話そうとする姿勢が大切。(政)

[5] 読む分野

- 1 自分自身の関心事を扱う文献を探して読む。1つの話題について、英語を媒体として、専門家の域に達するよう心がける。(最)
- 2 英語で書かれた雑誌や研究誌を注意して読んだりすると良い。自分で選び、自分の考えた方法で摂取しなければいけない。(最)
- 3 最良のコンディションで読書に臨むべきである。(最)
- 4 読む速度をなるべく遅くしてじっくり読むことが大切である。(最)
- 5 1つの作品を、生命力をもったトータルな存在としてとらえ、著者の知性の特性に関心を持って英文を読むことが大切である。(最)
- 6 「第三の読み」-批判的味読-を行う。(近)
- 7 目を訓練してなるべくたくさん語を一度に見ていくこと。(松)
- 8 (速く読むために) 決まり文句とイディオムを理屈ぬきにたくさん覚える。(松)
- 9 自分のさがしている語をいち早く見つける訓練をする。(松)
- 10 英語の1行は、目を3回ほど静止して読む。重要な言葉(名詞や他動詞)を飛び石的にとらえて、全体の意味を理解できるようにする。(松)
- 11 速読速解は、行の中の「鍵」になる言葉を拾って読むことである。(松)
- 12 只管朗読し、中学のテキストを暗記することが基礎を作る。(國)
- 13 表現読み解釈学習:「解釈のポイント」に沿って解釈分析していく。(近)
- 14 英語のリズムを身につけること:英文の意味、構造もそのリズムにあわせて理解できるようになる。(日)
- 15 日本語を介さずに英語を理解する。(日)
- 16 読みながら、イメージを頭に描く。(日)
- 17 英語の語順通りに、頭からかたまりごとに理解して、次々に推理して読む。(政)

[6] 書く分野

- 1 英文を書くためには、最低、大学入試の英語は80%こなす読解力が必要であるが、最終的には心的態度にかかっている。(最)
- 2 英語と自分の間に心理的な距離をおいてはいけなし、形式でなく内容に関心を集中させなければならない。そのためには、英文を絶えず読むことが必要である。(最)
- 3 専用のノートを作り、文章を綴る習慣を養う。(最)
- 4 英語の本を読み、その中で浮かんだ想念を、引き金となった英文の箇所と一緒に書きとって

- おく。(最)
- 5 効果的な説得力のある言葉で、人の興味を引くように書く。(最)
 - 6 日常生活を送る中で心をゆさぶるものについて書いてみる。そのあと、英米の新聞雑誌ではそのことについてどのように表現しているか研究してみる。(最)
 - 7 入れ替え作業を行って、正確な文章を書く基礎を作る。100ページほどの大学ノートを1年間に12冊使い果たすつもりで、1日に100題の原文を使って毎日行う。(松)
 - 8 文を書く基礎となるものは、読書と入れ替え作業と「あなた自身の経験」である。(松)
 - 9 英文を書く要領：創作文は過去形を用い、散文は現在形を用いる。なるべくbe動詞を使わずにすませる。毎日何か書く。ふだんから「たね」をさがしておく。ほかに用のない時は、英語で考えている。ペンより速く、次のことを考える。(松)
 - 10 英文を書く時にしてはいけないこと：日本文で原稿を書くこと。はじめから細かいこと(綴りとか、冠詞とか、単複)を気にすること。(松)
 - 11 最終目的は情報の伝達か、説得か、楽しませることかを定める。その目的に最適の材料を集め、話の配列と構成を考える。目的に合った文体を考え、語るつもりで書く。(近)

[注]

- 1) 梶田正巳『授業を支える学習指導論 - Personal Learning and Teaching Theory』(金子書房、1986年)
- 2) 宮田学「プラットフォーム研究と英語教育への適用 - 英語 P L T の測定と分析 -」(名古屋短期大学研究紀要第26号、1988年)